

## 低金利の継続と不安心理の後退が 追い風になると期待される先進国債券

先進国債券は、昨年後半以降、為替変動を考慮しない現地通貨ベースのパフォーマンスが堅調であった一方、為替市場における円高基調を背景に、円ベースでのパフォーマンスは軟調となりました。

主要先進国において、景気回復ペースの鈍さや低いインフレ率を背景に、低金利政策が続いていることなどから、債券の利回りは低い水準にあるものの、パフォーマンスは概ね堅調な推移が続いています。一般に、景気回復が弱く、金融緩和が続く環境では、信用力の高い先進国債券は買われる傾向にあります。IMF(国際通貨基金)によると、今年の先進国の経済成長率は、弱い外需や生産性の低い伸びなどが重石となるため、昨年と同じ1.9%と予想されており、主要先進国における低金利環境は今後も継続するとみられます。

一方、為替市場では、昨年8月以降、世界景気や米国の金融政策の先行き不透明感の強まりなどから、安全資産として円が買われ、円高基調となりました。その後も、年初からの世界的な金融市場の混乱に加え、米国の年内の利上げペースが緩やかになるとの見方が広がったことや、4月末に日銀が金融政策の現状維持を決定したことなどで、円高が大きく進みました。そのため、円ベースの先進国債券のパフォーマンスは、為替のマイナスによって、悪化しました。しかし、FRB(米連邦準備制度理事会)が金融引き締めスタンスを維持する一方で、日銀は金融緩和を続けるという金融政策の違いは継続しており、今後、米国の景気指標により結果が出てくれば、金融市場の不安心理が後退し、米ドルは底堅く推移すると考えられます。また、日銀のマイナス金利政策によって、日本国債の利回りの多くがマイナスとなったことで、国内投資家による外債などへの投資が促されるとみられ、中長期的な円安要因となる可能性もあります。

円高圧力はしばらく続く可能性があるものの、主要先進国における低金利環境の継続と、米国の景気回復に伴う金融市場の不安心理の後退は、先進国債券にとって追い風になると期待されます。

### 先進国債券のパフォーマンスと為替の推移

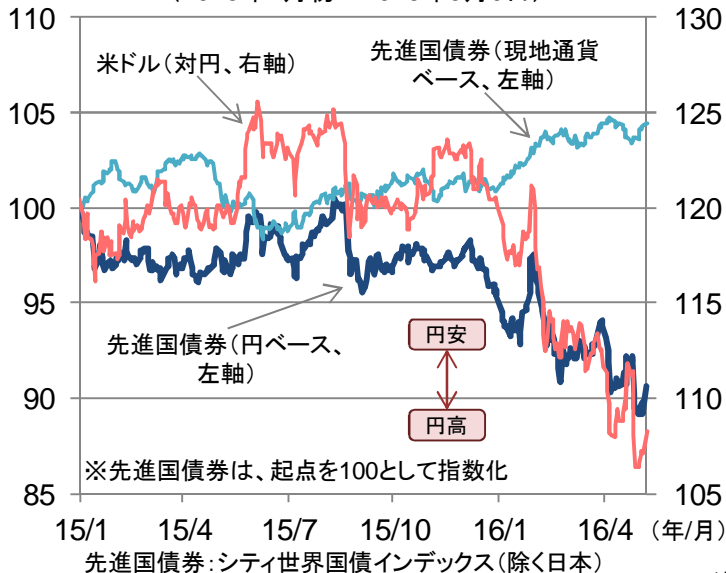
(2015年1月初～2016年5月9日)

(円)

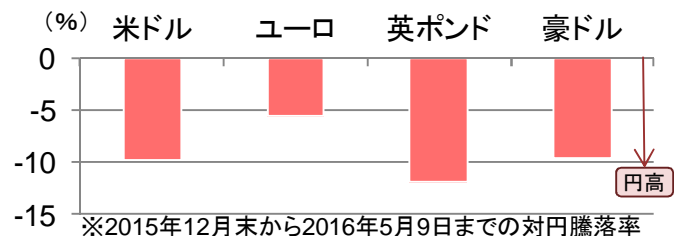
(%)

### 主要先進国の10年国債利回りの比較

(2015年12月末と2016年5月9日)



### 主要通貨の昨年末からの対円騰落率



(信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

※上記は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

日興アセットマネジメント

■ 当資料は、日興アセットマネジメントが市況等についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■ 投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。